

16世紀のフランスの思想家パスカルは、その著書『パンセ』の中で、人間が人間らしくあるための不可欠な条件として、「不思議さへの感動」を挙げています。それは自分が今ここに生きているという動かしがたい事実深く心を揺さぶられることです。自分はこの地上に生を受け、現在という時点を生きることが許されているという事実の不思議さに感動する、これこそ人間らしい人間として生きるための必須条件だ、と言うのです。

このパスカルの言う不思議さへの感動の基盤にあるものは、聖書の人間理解です。その例として詩編8編をひもといてみましょう。

この詩人にとって、宇宙と生きとし生けるものすべては、神の思いが込められた神の被造物なのです。この信仰に立って詩人は詠います。「主よ、わたしたちの主よ。あなたの御名は、いかに力強く、全地に満ちていることでしょう。」

詩人は夜、地上から空にこうこうとする月を仰ぎ、はるか彼方に輝く星を眺めます。彼にとってそれらは単なる自然物ではなく、聖なる神の偉大さと慈しみを湛えた神の被造物です。「あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。」

翻って詩人は、月や星に比べると余りにも小さく、取るに足りないように見える人間の存在を考えます。この小さく、弱い人間が、神によって最も大切な存在として慈しまれているのです。このことを彼はあらためて心に刻み、深い感動を覚えるのです。「そのあなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう、あなたが願ひてくださるとは。」

つまりこの詩編の詩人にとって、私が、そしてあなたが今現在生きているというのは、偶然ではないのです。それは、神の愛と慈しみの産物なのです。宇宙から見れば実に小さく、取るに足りないように見える人間を、神はしっかりと御手の内に置き給い、慈しんでくださるのです。私達はただ生きているのではなく、生かされているのです。

この詩編の詩人の言葉を、主イエスは、月や星の代わりに、最も身近な存在である百合の花と、野の草に目を留めます。「栄華をきわめたソロモンでさえ、この百合の花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。」

その取るに足りない花や草を慈しんでくださる神が最も心にかけてくださるのが人間なのだと主イエスは言うのです。「まして、あなたがたはなほおさらのことではないか。」(マタイ6:28)これは、「人は何ものなのでしょう。あなたが御心に留めてくださるとは」という詩編の詩人の言葉に呼応するものです。

現代人の多くは、この不思議さへの感動を喪失しています。自分が今生きているのは偶然でしかなく、そのことを不思議に思うなどは原始的人間の妄想に過ぎないと思いがちです。自己を誇示して他者の上に君臨する開き直りの精神こそ大切だと主張する現代人の病理は、まさにこの不思議さへの感動の喪失にあると言って過言ではありません。

私は不思議さへの感動に突き動かされて生きた最も人間らしい人間の具体的な姿を、水野源三という日本人のクリスチャン詩人に発見します。水野さんは幼い時に脳性麻痺を嫌い、一生を自宅の6畳間に敷かれたふとんの上で過ごした人です。私は前に水野源三さんの詩をこの講壇から紹介したことがあります。以下は水野さんが亡くなる数年前に残した詩の一つです。

「町の女子高生が見舞いに来てくれた。

寝たきりの僕のやせた手を涙ぐみながら握手してくれた。

僕は彼女の後ろにイエス様を見た。

私がいるよ。一緒にいるよ、という声を聞いた。不思議な感動だ。僕の心は洗われた。きれいになった。僕は生かされている。

素晴らしい恵みだ。生きていてよかった。」

ここに私達現代人が失ってしまった、生かされているという不思議さへの感動があります。6畳一間で一生を過ごさなければならなかった水野源三さんは、忙しく走り回っている私達に一つの重要なことを教えてくれています。それは、「僕は生かされている。素晴らしい恵みだ。生きていてよかった」と心から言える喜びです。

この不思議さへの感動こそ、人間の人間らしさの基盤です。ですから 私達もまた様々な紆余曲折をたどって今この礼拝堂で礼拝しているというこの不思議さに思いを馳せようではありませんか。その時、私達の理解を遥かに超えた神の愛によってこれまで支えられて来たということにあらためて気づき、深い感謝の念で私達の心は満たされるに違いありません。